

紛れもない「僕らの家」

同じ場所なのに建替える前とは何もかもが違う
家が変わると暮らしが変わり、毎日の過ごし方も変わってくる

億草庵

設計 海野健三

撮影 高山幸三

この連載で、建築家の海野健三さんの自宅を訪れたことがある。設計だけでなく施工もする海野さんが、細部にいたるまで自らの手で作り上げた家である。踏み違いのこぼことした階段、ゴムホースを使ったドアハンドル、ロープを結んだだけのブランコ、建築家はそのまま工作少年のようだった。

今回は、その海野さんが設計した「億草庵」にうかがった。建主の星野英治さん加代子さん夫妻とともに学校の先生で、英治さんは理科を、加代子さんは図工を教えている。加代子さんの友人が海野さんに自宅の設計を依頼していて、その家を見たときに「なんておもしろい家なんだろう」と感じた、その時の衝撃が忘

れられなかったという。
住宅に何を求めるか

家が建っているのは東京江戸川区。築15年ほどの中古住宅を買って8年間住んだあと、建替えることを決意。そのときに、海野さんに頼みたいと思いつき連絡を取り、夫妻で会いに行った。「壁で仕切られて何部屋あるという、今までの『家』という感覚から抜け出して、家族が集いたくなるような場所はどこなところだろうって、私たち家族も思っていたし、海野さんがそういう考えだったからこそ、家の設計を頼もうと思いました」と星野さん夫妻は言う。

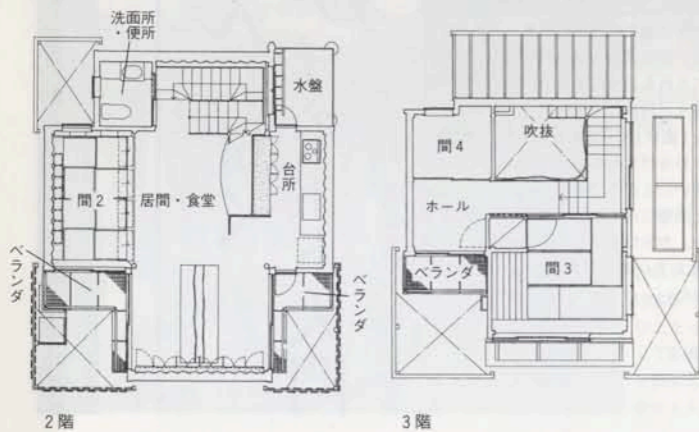
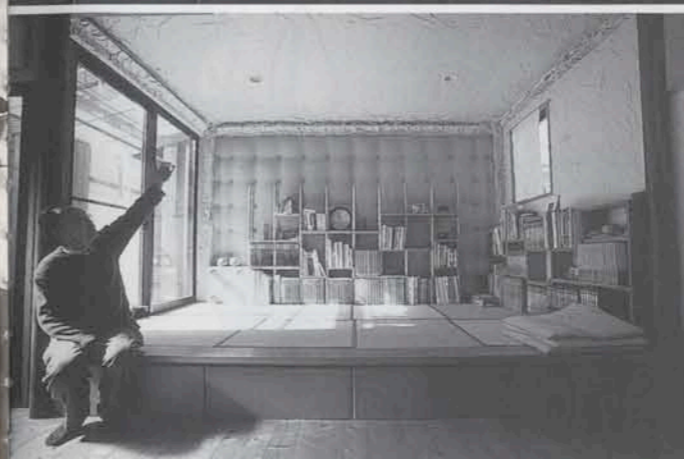
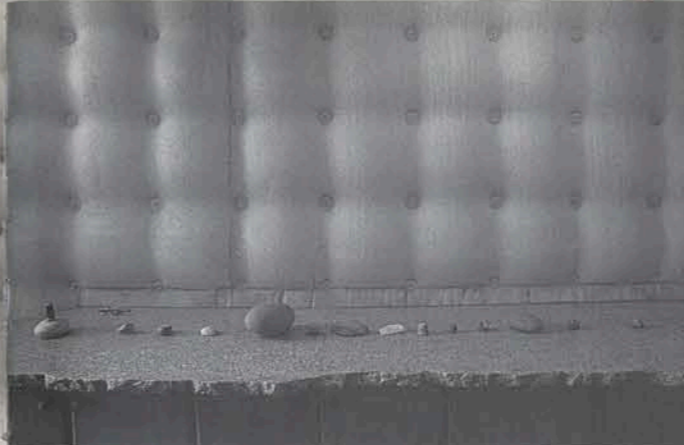
写真で見えてわかる通り、この家は通常の「住宅」とは異なる雰囲気

外にも内にもある。コンクリートのうねる壁（海野さん独自の構造「URC造」によるもの）、所々に出てくる鉄骨の力強さ、階段の手摺の曲線、鉄骨を巻いている和紙のごつさなど、通常の住宅ではお目にかれないディテールが随所にある。それは海野さんの設計の特徴が様々な場所で現れているともいえる。

海野さんは、自分を信頼して設計を依頼してくれたということは、海野さん独特の設計を受入れてくれているとは思いつつ、星野さん一家が住宅に求めているものは何なのかを考えた。以前は居間や食堂が1階

家が建っているのは込み入った住宅地で、1階はどうしても暗くなってしまう。以前は居間や食堂が1階

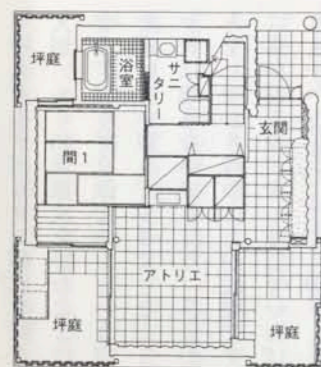




2階

3階

どこで何を話しても筒抜けになるのも、家族の仲がいいからこそ気にせずにいられる。「一人になりたいと思っても、この家では無理でしょ」と英治さん。家にいることが楽しみであり、家から刺戟を受けていると英治さんも加代子さんも言う。「この家は、住むということを考えたとき、人によってはいやだという人もいるかも知れません。確かに、誰にとっても住みやすいという家で



1階 平面図 1/200

名称=億草庵 (URC3)
所在地=東京都江戸川区
設計=海建築家工房
海野健三、小山充男
施工=直営
規模構造=地上3階鉄骨造
一部URC造
敷地面積=77.92㎡
建築面積=46.61㎡
延床面積=116.88㎡
家族構成=夫婦十子1人
竣工年=1999年

はないでしょう」と加代子さん。その言葉を受けて、英治さんも「人から見れば変わった家かも知れませんが、私たち家族にとっては『僕らの家』なんです」と話してくれた。海野さんが、星野さん一家のことを考え抜いて設計したこの家は多分、ずっと星野さん一家が住み続けるだろう。それが一番相性のいい組み合わせなのだ、家も家族も分かっているに違いない。

暗闇に人が

海野さんにとっては、設計図はあくまでメモ書きで、そこに書き込んだら完成ではなく、現場でどんどん変えていくことが多いという。だから自分で施工までする。「すぐそばに仮住まいしていました

で、暗く寒いなかで食事をするのが常だった。海野さんは、それを2階に配置して採光をとり、さらに四隅に庭をもってきて少しでも多く光が入るようなプランにした。一人息子の歩さん(いま高校1年生)の個室は最小限の狭さにおさえてある。海野さんは住宅の設計の際、いつも「子供部屋はいらないのでは」と提案するが、それを受入れてくれる人は少ないという。今回は、本当に寝るためのだけの部屋にして、ふだんは居間で家族みんなが過ごせるように設計した。ちなみに1階は土間で、陶芸のための窯が設置してある。加代子さんのたつての希望で、「夫の理解あつてのことです」と英治さん。英治さんもそれまでは庭でしていた日曜大工をこの土間で出来るようになり、2人で有効活用している。

から、しょっちゅう見に来ていました。図面ではまっすぐだった階段の手摺が、見に来たらグニャグニャに曲がっていて。息子が小さかったら反対したかも知れませんが、もちろんびびりませんでしたけど、すべてがワクワクすることで、住み始めてからも満足しています」と加代子さん。「手摺をこうしたら、星野さんは喜ぶだろうな」と考えてしまつて。星野さん以外だったら、事前に相談や報告をしたかも知れませんが」と海野さん。建主に了解を取らずに変更するというのは設計者としてすれすれの行為ではあるが、それが出来たのは信頼があつたからこそだろう。つい先日、歩さんが学校から戻つてくると、玄関近くに人影があつて、何かモソモソ動いている。一体誰?と思つたら海野さんで、隣家との境の段差を解消するために、コンクリートで作つた手作りの「おだんこ」を、せつせと積み上げていたそうなんですと加代子さんが教えてくれた。住み始めて2年半になるが、何ひとつ不満なく暮らしているという。壁がほとんどなくて、1階から3階までひとつながりになっているので、